銀板写真（島津斉彬像）一枚

【所　在　地】鹿児島市吉野町 9698 - 1　尚古集成館
【種　　別】国指定有形文化財（歴史資料）
【指定年月日】平成 11 年６月７日

銀板写真は，銀面に直接画像を写し込むという最も古いタイプの写真術である。1837 年にフランス人ダゲール（Daguerre）が発明し，発明者の名をとってダゲレオタイプともいわれる。よく研磨した銀板にヨウ素蒸気を当てて感光性を持たせ，これをカメラに入れて撮影し水銀蒸気で現像する。一回の撮影で一枚きり，しかも左右が逆に写るという欠点はあるが，銀板上に写し出される画像は鮮明・繊細で，瞬く間に人々を魅了し世界中に広まった。

日本においては，嘉永元（1848）年ころから研究がはじめられ，島津斉彬を中心とする鹿児島藩の研究グループが指導的立場に立っていた。嘉永７年，斉彬が出版させた川本幸民の『遠西奇器述』には撮影方法が詳細に書かれているが，実際の撮影は困難を極め，安政４（1857）年にようやく撮影に成功した。

斉彬の銀板写真は，安政４年９月 17 日，鶴丸城内で撮影されたもので，画像は薄目ながら，　裃
を着用した斉彬の像がはっきりと写されている。この写真が撮影されたころ，ヨーロッパでは次の世代の写真術，ガラス板を用いた湿板写真が主流となっており，1860 年代には日本でもこれが急速に普及したため，日本の銀板写真の時代は極めて短い。斉彬の写真は，日本人が撮影した現存唯一の銀板写真で，わが国の写真史を語る上で欠かせない資料となっている。